

生活との繋がりを重視した小学校社会科の学習指導

「予想」「疑問」「気付き」を大切にした授業実践

19062 小山 楓

キーワード: 資料の選定と活用 生活との繋がり 探究的な学習

概要

社会的事象と関わりの深い社会科の学習は、児童の生活経験によって学習意欲や授業の理解度に差が生じる。本研究では、児童が学習問題を焦点化し、事実や現状を捉えるために学習問題を吟味したり、教材研究や資料提示に留意したりして授業づくりを行ってきた。4つの授業実践を「生活との繋がりを実感させるための教材提示の工夫」「『予想』『疑問』『気付き』を重視した学習過程の構成」の2つの視点から考察していく。

I 研究のねらい・方法

社会的な事象について気付きを持ち、自ら問題を解決する力を育てる授業づくりの在り方と効果的な教材について、小学校中・高学年での実践と分析を通して明らかにする。

(1) 文献研究・先行実践等の調査 (2) 教材の選定と分析 (3) 指導計画の作成と授業実践・検討

II 研究の結果

1 授業実践の分析における2つの視点

(1) 生活との繋がりを実感させるための教材提示の工夫

社会的事象と関わりの深い社会科の授業では、児童の生活経験や興味関心と題材・教材を近づけること、つまり、教材と児童との心理的距離の近さが重要である。心理的距離の近さとは、児童の関心と題材の距離を表す。取り扱う学習内容が社会生活にどのような影響があるのかを把握させることにより、学習の必要感を持たせることができる。また、社会的事象に関わる人の思いにも触れさせることで児童に社会の一員として生きる態度を育てていく。

(2) 「予想」「疑問」「気付き」を重視した学習過程の構成

「予想」と「疑問」「気付きの交流」を重視した学習過程を構成する。予想を取り入れた活動を設定することで児童は、日常生活や経験を思い返したり、資料の読み取りに主体的に取り組んだりするようになる。同じ資料を読み取る活動、説明を受ける活動を行う際も、1人の疑問を学級の疑問として取り上げ、学級全体で共有し、友達同士で考え、交流することにより、課題を多角的に考え解決する学習活動に繋げていくこともできる。また、課題に向き合った時に生まれる「気付き」も一人一人異なり、それらに触れることにより、学びを深めることができる。このような学習を繰り返すことによって、確実に知識を習得させ、問題を解決する力を育てていく。

2 実践事例

(1) 実践1 単元名「わたしのまち みんなのまち」(東京書籍・小学校第3学年)

1) 単元について

東北地域唯一の政令指定都市である仙台市には平野や山地、海沿いの地域など様々な地形があり、その土地の特色を生かしながら人々が生活している。仙台駅周辺の地域は、商業施設が多く高層の建物も目立つが、北部にある泉パークタウン周辺の地域は、住宅街が広がっている。東部の仙台港周辺では貿易業が盛んであるのに対して、西部の秋保地域では観光業が盛んである。宮城県の中心に位置し、東西に長く広がる仙台市は、児童にとっても身近な題材で、社会科学習の導入として仙台市の地形と土地利用を主体的に学ぶことができる。本単元では、仙台市の様子を観察し、地形や土地利用の様子、交通や人、建物の様子について調

べ、調べたことを表や地図に表して、自分達が生活する市には、様々な場所があり、その様子は場所によって特色があることを具体的に考えることを目指す。

2)実践の考察

i 生活との繋がりを実感させるための資料提示の工夫

単元2時間目の「見通しを持つ」時間では、空から町を眺める、いわゆる「鳥の目」を持たせるために、全体を俯瞰させ、仙台駅周辺を見渡す活動を行った。教科書に載っている写真ではなく、「仙台駅周辺から東側を写した写真(図1)」と「仙台市の地図」を用意し、特徴を読み取らせた。範囲が広いので「何を読み取れば良いのか分からない」「難しい」という声があったものの、机間指導では、「この2枚の写真は全く同じ?」「ずっと遠くまで見える?」など比較の目を持たせること、広く見渡すことを意識付けたことで、建物や交通に着目して読み取る様子が見られた。本時の写真の読み取りが次時の仙台駅周辺の地図の読み取りと結びつき、仙台駅周辺には高い建物が多く集まっていることを具体的に捉えることができた。また、指示せずとも八方位を書き込んだり、海や森など自然の様子についても読み取ったりしている様子も見られた。図2は、図1の写真から分かることを読み取った児童のワークシートである。南北については地図のみからの読み取りであったため、建物の名前程度しか書き出すことができていない。これに対して写真もあわせて提示した東西は、道路が「5,6車線」であること、遠方の自然環境にも着目して「海」「森、山」等も書き出すことができています。



図1 仙台駅周辺から東側を写した写真

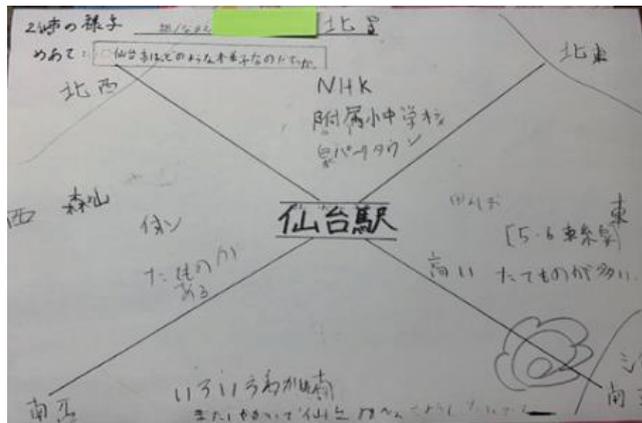


図2 児童のワークシート

また、仙台港のまわりの様子を学ぶ時間には、資料を提示する順番に留意した。まず工場や仙台港集まっている大きなトラックの写真を提示し、その次に高速道路や車線の多い幹線道路を写した写真を提示した。このような資料の提示によってほとんどの児童は、工場で作ったものを運ぶ「物流」に気付くことができた。図3、図4はT-C記録の抜粋と、児童が記述したまとめの抜粋である。C2は、仙台港からフェリーに乗って出かけたことを思い出し、具体的な地名を挙げながら本時のまとめを記述している。C2の発言によって「船で運ぶ」という気付きをした児童がC1である。C1の授業中の発言とまとめの記述を比較すると、下線部のように高速道路や貨物鉄道等、より多くの交通手段を書き出している。C3は授業中に、仙台港周辺にある工場を思い出し発言した児童である。これは、C3が既に持っていた知識と授業での学びを関連付けて考えることができていますと見える。

【T-C記録より抜粋】
T: (仙台港のまわりには)なぜ工場が多いのでしょうか。
C1: 貨物鉄道があるから、そこに荷物を入れて運ぶ。
C2: 工場が近くにあるのだったら、北海道とかに運ばれる。
C1: ああ船か。

図3 T-C記録の抜粋

「仙台港のまわりには工場が多い。なぜなら」に続く記述
C1: 高速道路や貨物鉄道、船があるから。
C3: 仙台港のまわりには工場が多い。魚を調理してから神奈川とかに運ぶため。
C4: 貨物鉄道があるから、そこに荷物を入れて運ぶため。

図4 T-C児童が記述したまとめの抜粋

ii 「予想」「疑問」「気付き」を重視した学習過程の構成

本実践では、資料を読み取る力の向上も成果の1つとして挙げられる。地図を読み取る活動を始めたばかりの頃には、地図記号の数を1つずつ数えてその数をノートに書き出したり、地図記号をそのまま書き出したりする程度であった。加えて、東西南北の意識が薄く、地図上の上下で表すことしかできていなかった。読み取りの回数を重ねるにつれて、前時までの地域と比較したり、地図の縮尺から、実際の距離を求めようとする様子が見られるようになった。図5で示した児童Aのノートの記述を例に挙げると、第3時では建物のみに着目して読み取りを行っていたが、第5時では交通や自然環境の読み取りもできている。また、気付きを文章で記述することができるようになってきている。

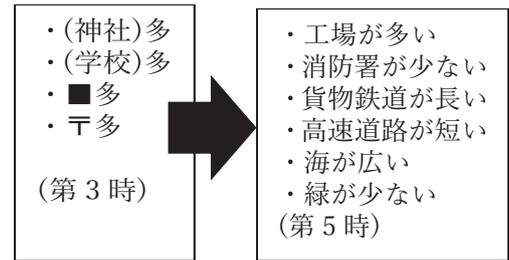


図5 移動のノートの変容

児童Aのノートの記述を例に挙げると、第3時では建物のみに着目して読み取りを行っていたが、第5時では交通や自然環境の読み取りもできている。また、気付きを文章で記述することができるようになってきている。

3) 実践の振り返り

本実践では、児童が住んでいる仙台の街の特色を「土地」「建物」「人」「交通」の4つの観点を意図的な資料の提示によって読み取らせることができた。毎時間学びを重ねていくうちに児童は、前時までに学習したことと比較して学習問題に対する予想を立てるようになったことも成果の1つであると言える。

(2) 実践2 単元名「事故や事件からくらしを守る」(東京書籍・小学校第3学年)

1) 単元について

消防署や警察署などの関係機関は、地域の安全を守るために、相互に連携して緊急時に対処する体制を取っている。火災、交通事故、犯罪などの緊急事態が発生した時には、緊急指令室等を中心にネットワークを活用して消防署や警察署などの関係機関が状況に応じて迅速かつ確実に事態に対処していることや、近隣の消防署や警察署、市役所や病院、放送局、水・電気・ガスを供給している期間などが協力して地域の安全を守っていることを理解する。教師による説明が中心になるものの、自ら問題を解決する力を育て、地域社会の一員としての自覚を持たせ、社会に参画することの重要性に気付かせていくのに適している。本単元での学びを通して、人々の生活の安全を守るために働く警察官の仕事や役割を身近なものとして捉え、理解するとともに、働くことや地域社会の一員として生きることを考えられるようにすることを目指す。

2) 実践の考察

i 生活との繋がりを実感させるための資料提示の工夫

通信指令室の前方にある縦3m、横6mの巨大なスクリーンの大きさを捉えさせるために、紙のメジャーを広げることでスクリーンの大きさを実感させた。以下は活動の様子を写した写真である(図6参照)。はじめは3m、6mの長さを「普通だ。」と発言していた児童は、その長さを実際に見ることで「長い。」と気付き、理解が深まった。また、紙のメジャーを使用し、広げたことにより、捉えにくい長さや大きさを普段過ごしている教室との比較で捉えることができた児童もいた。その児童の気付きを取り上げ、スクリーンの詳しい説明を続けた。本活動では、普段はあまり授業中に発言をしない児童も「自分が手伝いたい。」と言って手を挙げていた。これらのことから、紙のメジャーを広げた活動は児童の興味や関心を引きながら、巨大なスクリーンの長さや大きさの理解を促す有効な手立てであったと言える。本実践では、宮城県警察での取材で知ることができた「実際の数字」を活用した。図8は授業の中で提示した数値である。実際の数字は、児童の記憶に残りやすい。単元4時間目「前時の学習内容の振り返り」では、110番通報から警察が現場に到着するまでの時間を「7分6秒」と発言し、しっかりと覚えている。実際の数値を提示することにより、短い休み時間(5分)や長い休み時間(20分)との比較から時間の長さを体感することができていた。



図 6 紙のメジャーを広げている様子

- ① 110 番通報から警察官が現場に到着するまでの平均的な時間→7分6秒
- ② 1日平均の110番受理件数→413件
- ③ 通信指令室内の席数→8席
- ④ 宮城県内の警察官の人数→約4300人

図 7: 授業で提示した実際の数字

ii 「予想」「疑問」「気付き」を重視した学習過程の構成

本実践では、必ず学習課題を提示した際、児童に予想をさせる時間を設定した。以下は、第3時「通信指令室にどれくらいの人がいるか」について考える授業記録の抜粋である(図8参照)。児童は始め、根拠のない数字を言っていたが、予想の活動を続けるうちに、焦点化が図られ、より現実に近い数字を発言する姿が見られるようになった。C5の児童は、予想よりも実際の数字が少なかったことに驚きを示していたため、これを取り上げ、理由を説明させたのが下線部②である。また、C5は、警察官の仕事の多様性にも着目している。この気付きは次時の学習内容に関わる内容であった。通信指令室内に受付台と指令台を合わせて8席では少ないと驚く児童はC5の他にも多く見られた。この他にも「他の県はどうなっているのか」「どうして110番をすると全て宮城県警察本部につながるのか」などの疑問を多く聞くことができた。

【通信指令室内の席数の説明】

C5: もうちょっと多いのかと思った。①
 T: ああそう?どのくらいあると思った?
 CC: 20とか50とか。
 T: 指令台以外?何かあるって思った?
 C5: 僕は100台って予想しました。そのわけは、警察の指令室があるところにはきっと他にもいろいろ仕事があるはずだからと考えたからです。②

図 8 T-C 記録の抜粋

3) 実践の振り返り

本実践では、児童が見学に行けないことを考慮し、授業者が事前に宮城県警察で取材を行った。取材で得た知識を十分に活用した事実を取り上げることに加えて、そこで働く人や関わっている人の「思い」を取り上げる必要性を学んだ。どのような思いや努力があっても自分たちの生活が守られているのかを知ることで、社会の中の自分の役割や使命を主体的に考え、捉えさせることができるのだろうと考えた。

(3) 実践3 単元名「はたらく人とわたしたちの暮らし ー店で働く人ー」

1) 単元について

スーパーマーケットを中心の題材として、商品を売るための工夫や集客のための工夫、はたらく人の思いを知る。多様化する買い物の仕方のいずれも消費者の要望に応えようとする販売者の思いや工夫があることを知り、考えることを通して、販売者の仕事と消費活動や生活との関わりを追究していくことができる。本単元での学習を通して、地域にある販売の仕事に見られる工夫が、消費者の多様な願いを踏まえて行われていることを理解することを目標とする。

(2) 実践の考察

i 生活との繋がりを実感させるための資料提示の工夫

第3時で「スーパーマーケットにお客さんがたくさん来る秘密」を予想した際、数人の児童から「広い駐車場や駐輪場」といった考えが出たため、Google マップを使用し、敷地の中の建物と駐車場の色分けを行って提示を行った(図9)。児童からは、「やっぱり駐車場広いね」や「そんなに広いのだね、お店より広い」というつぶ

やきがあった。本時のまとめに記述している児童も見られ、多くの児童にとって理解しやすい資料を作成することができたと捉えている。

また、1年次の授業実践での課題を生かして本実践では、第5時「はたらく人にインタビュー」をかねて「はたらく人の思い」に触れる時間を設定した。児童の予想や知りたいことを生かし、授業者が実際にスーパーマーケットに取材を行った。そこで店長の方にお話をお伺いした話を授業の中で取り上げた。C8は、第3時の集客のための工夫の予想で「お店をきれいにしている」と記述していた児童である。本時でお店の人の思いを知ったことにより、自分たちがお店の工夫と捉えていたことが、お店の人によって行われている工夫であること、お客さんの要望が基になっていることに気付かせることができた(図10参照)。

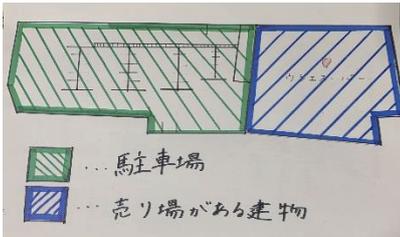


図9 駐車場の広さを実感させる資料

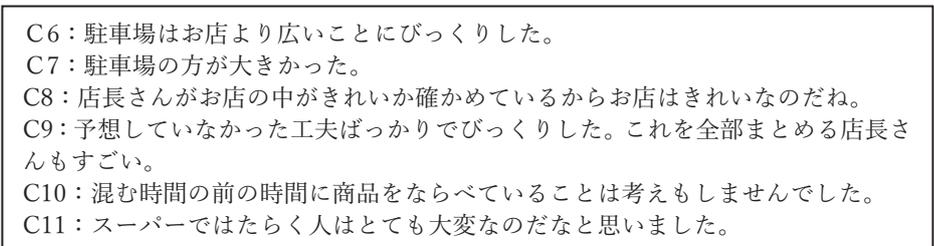


図10 児童が記述したノートの抜粋

ii 「予想」「疑問」「気付き」を重視した学習過程の構成

第3時間目には、次時以降の学習課題を生み出すため、児童自身の経験を思い出させながら、スーパーマーケットにお客さんがたくさん来るための秘密を予想する活動を設けた。スーパーマーケットの様子を思い浮かべることが難しい児童への配慮として、教科書にあるスーパーマーケットの鳥瞰図を開いて読み取るように指示を行った。それぞれ買い物に行った経験や、教科書の絵を見ながら工夫を予想している児童の姿を見取ることができた。図11は児童のノートの抜粋である。C13はお店の中のことに着目していると言える。反対にC15はお店の外のこと、駐車場や駐輪場について記述している。本活動を行ったことにより、第4、5時の「スーパーマーケットを見学する」探究的な活動に関心やそれぞれの疑問を持って取り組むことができたと感じている。また、児童の疑問を事前に把握することができたために、第4時以降でどのような活動を取り入れるのか、どんな資料を提示するのが良いかをもう一度吟味することができた。

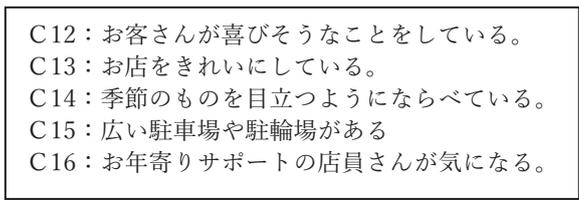


図11 スーパーの秘密を予想する児童の記述の抜粋

3) 実践の振り返り

本実践では児童がスーパーマーケットに見学学習に行くことができないことを考慮し、授業者が実際にスーパーマーケットに取材に行き調べたことを、教科書の資料を活用しながら、空間を意識して授業を展開した。本単元の学習は、特に児童との距離が近いと考え、本単元の学びを終えた後児童が買い物に行った際の興味や関心を広げたいと考え、資料提示の仕方や学習活動の設定に留意して授業づくりを行った。

(4) 実践4 単元名「江戸幕府の政治の安定」(東京書籍・第6学年)

1) 単元について

徳川家の歴代の将軍が江戸幕府を長く存続させるためにどのような政策をしたかについて学習するものである。参勤交代や鎖国などの政策から権力者の意図をつかませることで、社会的な見方や考え方を養うことができる。本単元の学習を通して、参勤交代や鎖国などの幕府の政策、身分制を手がかりに、武士による政治が安定

したことを理解するとともに、主体的に学習問題を解決しようとする態度を養うことを目指す。

2)実践の考察

i 生活との繋がりを実感させるための資料提示の工夫

本実践では、主発問の問題追究の意欲を持たせるため、写真をはじめとする資料を提示した。特に第3時の参勤交代の学習を行う時間には、仙台藩の参勤交代の様子を記した写真や資料を提示した(図13参照)。仙台藩13代藩主の伊達慶邦の大名行列に参加した人数は1500人で約417.8mの長さがあったとされている。本時の主発問で参勤交代を行うことが各藩の大名にとってどれほど大きな負担で、幕府にどんなねらいがあったのかを追究させる手がかりとして、418mの長さを見童が連想しやすいものに例えたり、どんな人が行列に参加していたのかを資料を合わせて提示したりした。見童は、「新幹線14両くらいの長さもあるなんてとても長い。」「今は新幹線に乗れば1時間半位で着くのに歩きたと何倍も時間が掛かるのだ。」「薩摩藩は40日、仙台藩は7日くらいで着くのだね。」と発言する見童の姿が見られた

見童に江戸時代が長く安定して続いたことを意識付けさせるために、単元を貫く「江戸幕府はどのようにして政治を安定させたのだろうか」という学習問題に関連させ、「江戸幕府が続いた260年は長いのか短いのか」という発問を投げかけた。この発問に対して、「鎌倉時代や室町時代などの既に学習している時代と比べて長い」、「江戸幕府は約260年で将軍が15人ということは、長く続いたと言える。」と考え発言する見童の姿を見取ることができた。



図12 徳川15代の家系図

仙台藩の大名行列の様子

- 仙台藩から江戸まで約360km
- 7泊8日の道のり
- 奥州街道を通過していた
- 行列の人数は、1577人。
- (13代藩主義邦の時)

図13 仙台藩の大名行列に関する資料

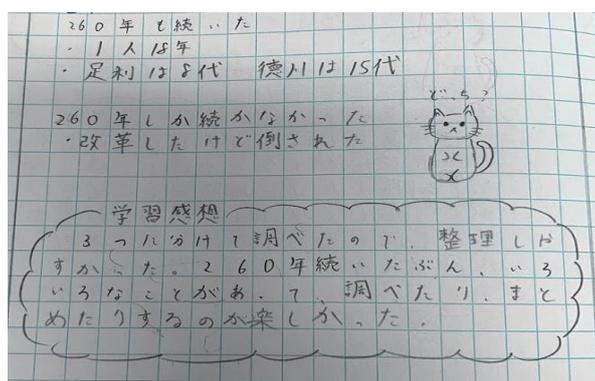


図14 見童のノートの抜粋

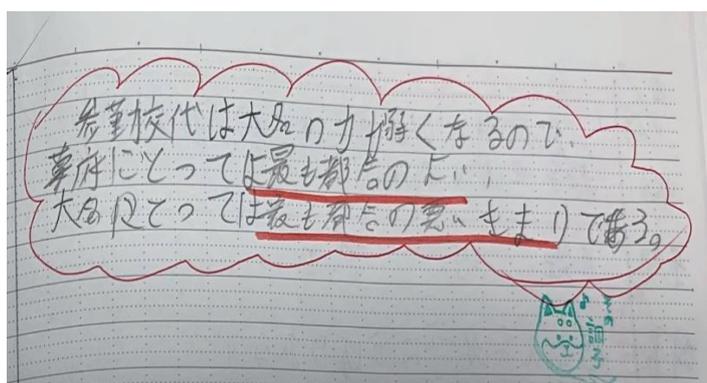


図15 見童が記述したまとめの抜粋

ii 「予想」「疑問」「気付き」を重視した学習過程の構成

本実践における探究的な学習段階では、以下の表1の通り、各時間の学習課題を設定し、授業を展開した。同じ学習活動や発問を繰り返すことで見童は、調べる作業をすばやく行えるようになったり、資料から読み取ってノートにまとめる際に、短い言葉でわかりやすく、時にはグラフを書き写したりするようになった。調査活動の後の調べたことを学級全体で共有する際に見童は、資料のどこから読み取ったのかを合わせて言うようになったり、

発言した児童とは異なる児童から「他にここにも書いてあった。」「こっちの資料は絵もあって詳しいよ。」などと発言したりする姿を見取ることができた。

表 1 各時間に設定した学習課題と調査のポイント

時数	各時間の学習課題	設定した調査のポイント
②	徳川家康はどんな將軍だったのだろう。	徳川家康の人柄 / 行ったこと / その他
③	参勤交代は、大名にどんな影響を与えたのだろう。	参勤交代がどのようなものであったか / 大名が負った負担 / その他
④	江戸幕府の身分と人々のくらしを調べよう。	身分の種類 / 住む場所 / その他
⑤	江戸幕府はどのようにしてキリスト教を禁止したのだろうか。	キリスト教を禁止した背景 / 取り締まりの方法 / 禁止した結果

3) 実践の振り返り

本実践での調査活動時では、各時間に調査のポイントを3つ提示した。これにより「3つに分けて調べたので、整理しやすかった。」という児童の記述が見られた。表1は、各時間に提示した調査のポイントの抜粋である。提示した3つの調査ポイントに沿って教科書や資料集を読み取り、ノートにまとめていた。また、支援が必要な児童にとっても、資料から何を読み取れば良いのかが明確になり、進んで資料を読み、まとめる姿を見取ることができた。生活との関わりの低い歴史的分野の学習においても、児童にとって身近である仙台藩の資料等を提示したことにより、児童の関心を高めることができたと感じている。

Ⅲ 研究結果の学校教育における位置付け・意義・応用性・期待

本研究の有効性を検証するため、「生活との繋がりを実感させるための教材提示の工夫」「『予想』『疑問』『気付き』を重視した学習過程の構成」の2つを手だてとして授業実践をして、その分析を行った。授業後の分析を行うことにより、児童に生活との繋がりを実感させるための有効な授業展開であったかを考えることができた。特に、児童が授業時間内に記述したノートや発言を振り返ることで、自ら問題を解決する力を身に付けさせるための手だてが見えてきた。

「生活との繋がりを実感させるための教材提示」「『予想』『疑問』『気付き』を重視した学習過程の構成」を工夫することにより、学校での学びと児童の日常生活との距離を近づけ、学びを生活に反映させようとする態度を身に付けることが期待できる。

教科書を基として、児童の気付きや疑問が生まれる授業を展開することは、主体的な学びを実現させるために重要である。社会科に限らず、他の教科においても、「わかる」「できる」喜びを実感できるような有効な学習活動を今後も検討していきたい。

Ⅳ 参考文献

- ・ 澤井陽介 2018年:「小学校 新学習指導要領 社会の授業づくり」明治図書出版.
- ・ 柴田義松 2000年:「教育課程-カリキュラム入門」有斐閣.
- ・ 澤井陽介, 加藤寿朗(2017年):見方・考え方[社会科編], 東洋館出版社.